

SHIMANTOGAWA MONOGATARI

2020.12.25
Vol.290

四万十川財団設立 20 周年記念！首長インタビュー 第 5 弾 津野町長 池田 三男氏



いつも清流通信をご愛読いただきありがとうございます。さて、今月の清流通信は財団設立 20 周年記念企画 第 5 弾！ということで、これまで 4 市町の首長にご登場いただきましたが、いよいよ流域 5 市町最後の回となりました。今回は、四万十川源流の地、津野町の池田三男町長です。

■ 町長は新庄川流域のご出身と伺いましたが、小さい頃の川の思い出、また四万十川の思い出があれば教えてください。

私はこれまで登場して来られた首長の方々たちと違い、四万十川流域出身ではありませんが、新庄川沿いで育ちました。皆さん仰っていましたが、私たち世代はみんな川で育ったようなもので、少し暑くなってきたくらいから川に行って朝から晩まで遊んでましたね。上級生に置いていかれないように、小学校低学年の頃から上級生について泳ぎに行っていたことを覚えています。そのおかげか、高校にあがってプールで水泳の授業が始まりましたが、街の子たちより泳ぎは得意でしたよ。また、寒くなってきたら、父や兄に習いながらよく川で釣りをしました。あまり得意ではなかったですが、ウナギを釣ったときは嬉しかったですね。

四万十川の思い出と言えば、中学校の頃に稲葉洞に行ったことですね。兄に「鍾乳洞があるらしい」というのを聞いて、友達 5 人と自転車で行ったんですが、今思うと

よく子どもだけで入ったなと思いますが、怖いながらもとてもワクワクして面白かったなという思い出があります。これが四万十川との初めての接点でしたね。

→ 四万十川源流点のほど近くにある稲葉洞



■ 町長の四万十川での一番の思い出は何ですか。

先日地元の方に案内してもらって裏源流を見に行ったんですが、あれは良かったですね。本流の源流もちろん素晴らしいですが、裏源流（北川川）も津野町としては押していきたいと思いました。裏源流のほうはもともとその地域が林業で栄えたという歴史もあり、森林軌道が少しですが残っているんですよ。なので源流点にはないまた違った良さがありますね。本流、裏源流どちらも言えることですが、源流の良さは周りの木々や自然が素晴らしいことだと思います。個人的には新緑の源流点はおススメですね。

今回の新型コロナウイルスの影響で、多くの方々が自然に目を向けるようになったのではないかと思います。津野町では、来年4月にフォレストアドベンチャーがオープン予定、また四国カルストの宿泊施設、天狗荘が来年6月に、同じく6月に四万十川源流点周辺の拠点施設として、せいらんの里がリニューアルオープンするなど、津野町の自然を体感できる観光拠点が続々と誕生します。源流点や津野町の自然を活かして、何とか地域経済の活性化につなげられるよう、力を入れていきたいと思えます。

■ 20周年記念ということにちなんで、この20年間で感じた四万十川の変化は何かありますか。

四万十川の水量に大きな変化はあまり感じませんが、他の方も仰っていたように、大雨の際、一気に増水して一気に水が引くようになったと思います。やはり山の保水力が落ちてきてしまったことが原因だと思いますが、下草が生えない、山肌が見えてしまっているような山が多くなりました。要するに管理できていない山が多いのです。植林された山も町内にはたくさんありますが、結局、後継ぎの家族が街に出てしまって山を管理する者がいなくなりました。もはやどこまでが自分の山なのかさえも分からないような事例も多いのではないかと思います。

またもう一つの変化としてはゴミですね。ビニールゴミが木に引っかかっている光景をよく目にしますが、あれは何かしなければいけないと思います。一方、不法投棄に関しては、一度全域を見て回り回収したことがありますが、それ以降少なくなったように思います。住民の目に入るような形で行いましたので、それも効果があったのだらうと思います。

■ これまで津野町では、四万十川に対してどんなことに取り組んできましたか。

大きな取り組みとしては、町設置型浄化槽の普及推進です。これは旧東津野村時代から行われていますが、合

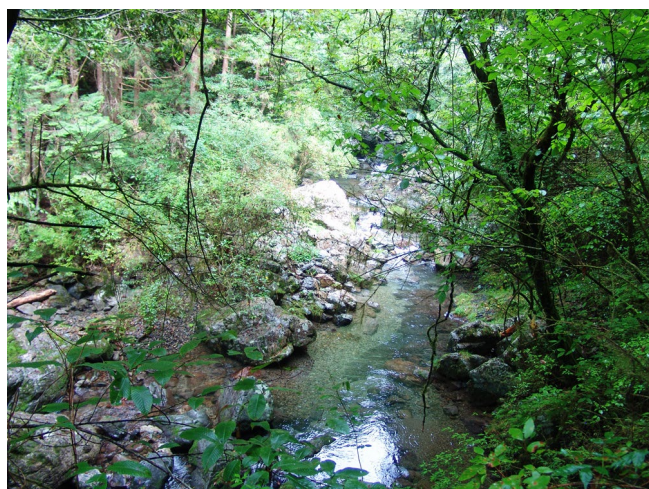
併後は旧葉山村地域でも取り入れて行っています。個人設置型と大きく違う点は、排出される水のBOD基準を厳しく設定している点です。通常、個人設置型の浄化槽では、BOD基準は20以下とされていますが、津野町では10以下を基準とし、家庭から出る排水をできるだけきれいに、「きれいな四万十川を守る」という意識のもと取り組んでいます。この取り組みは住民の方々にも広く理解していただいております、普及率は東津野地域でみると90%後半、町全体でみても約90%になっています。

また、町内に貯木場を整備し、林業をしやすい環境づくりにも取り組んでいます。これまでは町外に木材を持っていかなければならず、運搬が林業者の負担になっていましたが、H26年に貯木場を整備し、市場の機能も兼ねていることで、その負担は軽減されたのではないかと思います。

■ それでは最後に、今後の取り組みと、四万十川をどのように活かしていきたいかについて教えてください。

まず大事なこととして山の保全をどう進めていくかです。将来的に、地主が分からない山はどんどん増えていくことが予想されますので、森林環境税も活用しながら対策を立てていかなければいけないと考えています。津野町でも施業計画はかなりしっかり立てられているようですが、団地化（※分散している林地を集約し、作業の効率化、低コスト化を図る取り組み）がなかなかうまく進んでいないのがネックになっているのではないかと思います。また町内でも皆伐される事例がいくつか起こっていますが、やはり大切なのは間伐です。町としてもバックアップのため、間伐材の搬出（※国庫補助事業の搬出間伐で津野町内への搬出に限る）にかかる費用に対して1㎡あたり2,000円を森林所有者に補助しています。

あとはやはり子どもを川に連れていく、これをしっかりやっていく必要があると思います。津野町全体でも子どもが川で遊ぶ光景を見ることは昔に比べて明らかに少なくなっています。今は子どもも部活動や習い事で忙しいですし、親も川に行くのは危ないと注意しますから、



↑ 裏源流と呼ばれる北川



↑ 津野町の景色（口目が市集落）

今回、町長からたくさんの貴重なお話をいただきましたが、なかでも印象的だったのは町設置型の浄化槽の普及。設定しているBODの基準も普及率も驚きでしたね。また、町長のお話でも登場した北川川は、官民が協力し、近自然河川工法を全国でも先駆的に取り入れた川でもあります。今回の取材で、津野町の川の保全に対する意識の高さを改めてうかがうことができました。そんな津野町では、フォレストアドベンチャー・高知や天狗荘など、津野町の自然を楽しめる施設が来年続々とオープンするとのことです。コロナが落ち着いたら、ぜひ訪れて

これまで流域5市町の各首長にご登場いただきましたが、どの市町でも四万十川を思い、清流四万十を守り続けるという強い使命感を持って、保全活動に取り組まれていることが分かりました。森林保全や濁水対策、川ガキ育成など、市町ごとに様々な問題がありましたが、どの問題も各市町単独のものではなく、流域全体の問題として取り組んでいかなければならないものだと思います。今回流域が連携して四万十川の保全に取り組んでいくという想いを改めて各首長から確認することができたのはとても良かったです。四万十川財団もこれまで以上に、市町と連携しながら清流保全に取り組んでいく覚悟ですので、今後も四万十川をどうぞよろしくお願いします。



↑ 今回もコロナ対策のため、マスクを着用して取材にご協力いただきました。

[illegible]

HP : https://peraichi.com/landing_pages/view/shima-ntosauna